

非常ノ事故アリ一時已ムテ得スニテ父母又ハ親族等ヨリ
其事實ヲ詳記シ(疾病ハ醫師ノ診斷書ヲ添フ)郡區長ノ與
書證印ヲ受ケ本人ノ所轄廳ニ顯出ルトキハ陸軍ノ上往復
ヲ除キ二週日以内ノ歸省ヲ許ス其旅費ハ自辨タル可シ但
二等若水兵若火夫ハ本文ノ限ニ在ラス
第三十八條 現役中其職務勉勵ノ者ニハ滿三年毎ニ慰勞
金ヲ下賜ス但其現金ハ免役後復役若シハ下士ニ昇級ノ
トキ下附ス(書式略)
府 縣
○太政官連第六十號
明治五年(十月)第三百十二號連但書中一定候迄ノ下(官
船及ヒ)ノ四字ヲ追加候條此旨相達候事

○太政官連第六十一號
明治十六年十二月十九日 太政大臣三條實美
官省院廳府縣
○太政官連第六十二號
明治十六年十二月十九日 太政大臣三條實美
官省院廳府縣
○太政官連第六十三號
明治十六年十二月十九日 太政大臣三條實美
官省院廳府縣

○海軍省連第百十四號
海軍一般
東海鎮守府所轄練習艦波波號今般生徒實地演習ノ爲メ布
陸國ハ航行セシメ候條爲心得此旨相達候事
明治十六年十二月十九日 海軍卿 川村純義
府 縣
○農商務省連第二十號
府 縣
內國人民ノ備ニ應ニ其所有船舶ニ乘租居ル外國人有之向
國名氏并船名船主氏名トモ來明治十七年二月十五日
限リ取調當省ニ可届出尤自今備入又ハ解備候節ハ其都度
可届出此旨相達候事
但備入有無トモ本文日限迄ニ可届出
明治十六年十二月十九日 農商務卿 西郷從道

○大藏省告示第百三十二號
朝鮮國貿易ノ義ニ付本年第四十號布告ノ趣有之候間長崎
縣下對馬國原山口縣下長門國下ノ關福國縣下筑前國博
多ノ三港ニ長崎稅關出張所ヲ設置シ明治十七年二月一日
ヨリ開庭同貿易ニ關スル事務爲取扱候條此旨告示候事
明治十六年十二月十九日 大藏卿 松方正義

○明治十六年十二月十八日
外務少書記官從六位勳五等 三宮 義胤
任官内少書記官兼外務少書記官
任參事院書記官 牧 朴眞
兼任參事院書記官 參事院書記官 牧 朴眞
兼任參事院書記官 參事院書記官 牧 朴眞

英獨兩國ノ朝鮮條約ハ我日本人民ニ
何等ノ關係アルカ
我輩ガ去ル十一月一日時事新報ニ記シタル如ク明治九年以
來本年十一月初旬ニ至ルマデ我日本人民ノ朝鮮貿易ニ從
事スル者ハ無類最上ノ自由制度ノ下ニ在リテ隨テ大ニ營
進スル所ヲ知リ遂ニ一十年ノ輸出入貿易金額凡四百萬圓
朝鮮各港居留ノ日本人三千五百名内外ニ達スルコトハナ
リタリ然レモ十一月以來ハ頗ル此自由貿易上ニ内外種々
ノ變化ヲ來シ竹添辦理公使ガ朝鮮京城ニ於テ同國政府ト
結約シ退テ我政府ノ批准ヲ得テ十一月月初旬以來實施シ
テ、アル所ノ「朝鮮國」於テ日本人民貿易ノ權利「テ以テ朝
鮮諸港」出入スル日本船舶ハ一噸ニ付稅銀百廿五文小切
ノ船舶ナレバ其半額又ハ四半額ヲ課稅セシメ輸出ノ商

品ハ大抵其元價ノ五分八分一割二割五分乃至三割ノ
關稅ヲ賦課セラル、トナリタル折柄又候我日本政府ニ
於テ本月七日ノ布告ヲ以テ來年二月一日ヨリ朝鮮國ト
貿易ハ總テ他ノ外國貿易ノ手續ニ依ルコトニ定マリ日本國
内各開港場ヨリ朝鮮ニ往來スル船舶ニ手續料ヲ取立テ權
出入ノ商品ニ關稅ヲ賦課スル等總テ他ノ外國トノ貿易ニ
異ナラザルコトナリタリ僅々二百日ノ間ニ朝鮮ト云ヒ日
本ト云ヒ内外變化ノ急激ナル日本人民ヲシテ朝鮮國トノ
貿易ハ炎日熾クガ如キ盛夏ノ天ヨリ一躍シテ兩害兼々始
塞崩テ所ルノ嚴冬ニ入りタルモノナリトノ感覺ヲ起サシ
メタリ明治九年以來本年ニ至ルマデ日本人民ガ朝鮮貿易
上ニ於テ無比ノ自由ヲ享有シ來リ今日忽チ此變化ニ遭遇
シタルハ其辛苦固ヨリ察スルニ餘リアリト雖モ畢竟スル
ニ歡樂ハ元ト常ニ常ニモシキモノニアラズ前日歡樂ノ愛スベ
カリシガタメ今日普通ノ道理ニ基キ此歡樂ヲ減殺セラ
レタルヲ見テ敢テ不平ヲ唱フベキ理由ナキナリテ唯默シ
テ此辛苦ヲ忍ブノ外ニ工風ナカルベキナリ
然ルニ愛ニ日本人民ノ朝鮮貿易ニ關シテ一ツノ喜ブ
可キ報章ヲ得タリ即チ過日來時事新報ニ記載スル英吉利
獨逸ノ兩國使臣ガ去月二十六日漢城ニ於テ朝鮮政府ト協
議決定シタル修好通商條約ニ關スル報章是ナリ此報章ニ
依レバ兩國使臣即チ北京駐在ノ英國公使パークス氏ト橫
濱在留ノ獨逸總領事ザツメ氏ハ十月中旬共ニ漢城ニ到若
シ夫ヨリ朝鮮政府ト條約締結ノ談判アリ其條款ニ關シテ
ハ双方不承諾ノ事多ク爲メ大ニ時日ヲ遷延シ遂ニ十一月
二十六日ニ至リテ始メテコレヲ議決スルヲ得タリ此談判
ニ付テ英獨兩國使臣ハ相互ニ熟和協議ニ連合シテ朝鮮政
府ト往復討論シ從前ヨリ漢城在留ノ日本米國等ノ使臣ト
ハ連環メ談スル所ナク條約ノ次第ハ英獨共ニ同一様ノ
モノナリト云ヘリ又其條款中通商ノ事ニ關シテ朝鮮諸港
出入ノ船舶ハ三十錢ノ關稅ヲ賦課シ輸出入ノ商品ハ
二三種ノ無稅ノ外未製作品ハ從價五分、織物類ハ從價七
分半、精巧ノ製作品ハ從價一割、寶澤品ハ從價二割ノ關稅
ヲ賦課スルノ約定ナリト云ヘリ而シテ又英獨人民ガ朝鮮
内地旅行ノ權利ニ關シテ此報章ニ依レバ當時支那ニ行
ハル、河ノ如ク旅行券ヲヤヘ所持スレバ通商ノ地内各地
行勝手ナリトアリ(昨日ノ時事新報雜報欄内英獨條約ハ其
則)ノ一項ヲ參觀スベシ畢竟スルニ今回ノ英獨條約ハ其
全權使臣等ガ漢城ニ到リテ朝鮮政府ト協議決定シタル途
ノコトニシテ未タ其本國政府ノ批准ヲ經アルモノナルガ故
ニ遂ニ其條款ヲ世上ニ公示スルノ場合ニ至ラズ我輩亦尙
記載道中ノ條項ニシテ果シテ開通ナキヤ否ヤ固ヨリ之ヲ
審官スルコト能ハズト雖モ此英獨條約ヲ取テ目下我日本人民
民ガ運事スル所ノ修好條約并ニ「朝鮮國」於テ日本人民

貿易ノ權利「ニ比較スレバ英獨人民等ガ朝鮮ノ實際貿易
上ニ享有スル所ノ權利恩惠ハ日本人民ガ享有スル所ノモ
ノニ超過スルコト蓋シ幾等ノ上ニ在ルモノナラント思ハル
、ナリ仮令萬一ノ場合ニ於テ前記報章ノ事柄ヲ以テ信チ
措クニ足ラズトスルモ實際ノ事情ヨリ理テ以テ之ヲ推ス
ルハ信チ措カザラント欲スルモ能ハザルナリ何トナレバ
若シ英獨政府ニシテ其朝鮮トノ修好通商條約ハ日本米國
等ノ先例ニ倣ヒテ毫モ修正ヲ要セズトシテ悉ク同ニハ何
ツ今回ノ如ク一ヶ年餘ノ日月ノ間種々往復討論ノ末兼備
既ニ成ルヲ見テ特ニ全權使臣ヲ派遣シ實際議議ノ後一
ヶ月餘ノ日子ヲ費シテ始メテ協議決定ニ至レガ如キ非常
ノ煩勞ヲ取ルコトアラフヤ殊ニパークス公使ハ天津漢口ノ
水合シテ陸路ノ阻絶センコト氣遣ヒ條約印刷ノ翌日朝鮮
國王ニ謁見ノ禮ヲ終ルト齊ク直ニ上リタル等
ノ事情ヨリ見レバ一ヶ月餘ノ滯留決シテ偶々ノ阻絶ニ
ラズ英獨兩國政府ガ要求ノ諸點極メテ過酷ニシテ朝鮮政府
モコレヲ承諾スルコトニ躊躇シ談判頗ル困難ナリシガタメ
ナルベキヤ理ニ於テ甚ダ明白ナリ然レモ今兩國使臣ハ首
尾ヨク使命ヲ終リテ漢城ヲ退キ其使命ニ關スル事情ノ大
概ヲ聞知シアルベキ日本支那在留ノ英獨人民等モ甚ダ滿
足スベキ結果ナリト公言スルカラコトハ此條約ハ目下日本
朝鮮ノ間ニ存在スル條約諸規則等ニ比シテハ英獨人民ニ
取リテ頗ル便宜多キモノナリト斷言スルモ敢テ事實ニ違
ザカルノ恐ナカルベシ

英獨人民ノ勝利斯ノ如クコレナ日本人民ガ盛夏ヨリ嚴冬
ニ移リタルガ如キノ辛苦ニ比較スレバ一見雲泥ノ相違アル
モノ、如クコト思ハルレモ其實ハ決シテ然ラズ朝鮮貿易
上ニ關スル英獨人民ノ權利恩惠ハ英獨人民ノ獨有ノアツ
ズ即チ亦我日本人民ノ權利恩惠ナレバナリ「朝鮮國」於
テ日本人民貿易ノ權利「第四十二條」曰ク「我特チハ後
來朝鮮政府何等ノ權利特典及ヒ恩惠恩賜ニ論ナク他國官
民ニ施及スルモノアラフ日本國官民モ亦爾等ナク一體均
等スルヲ得」ト是即チ公法上ニ所謂最惠國條款ナルモノ
ニシテ此一句ノ存在スル限リハ日本人民ニシテ他ノ人民
ト對立シ一歩ヲ退クニ要ナクレバナリ思フニ英獨條約
ノ如キモ必ズ其批准實行ノ期ヲ急ヤ英獨人民ガ朝鮮各港
ニ輕便スルモ必ズ來春開水ノ期ニ後レザルナレバ我日
本人民ガチン者ハ眼ヲ開キテ他方學問ノ如何ヲ觀察シ毎
等ノ權利特典及ヒ恩惠恩賜ニ論ナク我モ亦爾等ナク一體
均等スルノ覺悟ヲ爲スコト目下朝鮮貿易ニ關シテ頗ル緊要ノ
事ナルベシ

○樺山海軍大將 國君には明治十九年直轄鎮守府及權須軍
造船所等と見分の爲に午年以前に於て新造の艦艇をて積

雜報